

お酒の楽しみ

AtoZ

vol.02

わたしたちと日本酒

◆ 日本酒のルーツはいつ?

日本最古の酒蔵の歴史は880年。新潟県内で最も歴史を長く刻む酒蔵は約470年と、各地を眺めると100年以上の歴史を持つ酒蔵はありふれています。あらためて考えてみると、途轍もないことですし、年月とともに文化的な重みがあると思うのです。ということで、長い歴史を持つ酒造りについて、そのルーツにまつわることに触れてみたいと思います。

それでは、日本酒自体のルーツはいつ頃までさかのぼるのでしょうか？諸説ある中では、日本に水稻農耕が渡来定着した弥生時代ではないかといわれています。ご存じのとおり日本酒は米が原料ですが、米のでんぷんを麴の酵素が分解してブドウ糖にし、それを酵母が食べて炭酸ガスと日本酒が生成されるというプロセスを踏んでいます。麴による酒造りが始まったのが奈良・平安時代からといわれていますが、それ以前は「口噛み」といって咀嚼して穀物のでんぷんを唾液の酵素で糖化させ、それらを坪のようなものに溜めておくと空気中の酵母が坪に入って



にいがた美醸 主宰

村山 和恵



PROFILE

村山 和恵 (むらやま かずえ)

秋田生まれ新潟育ち。短大で教員を務めたかわら、日本酒好きなことが高じて資格を取得し、講習会やイベント、執筆に関わるほか、日本酒の楽しさを多くの女性と分かち合いたいとの思いから、2009年から女性のための日本酒コミュニティ「にいがた美醸」を主宰している。2013年よりにいがた観光特使、2014年には女性としては新潟県初の「酒サムライ」に叙任。2020年に小笠原流礼法の師範を取得するなど、活動の幅を広げている。

にいがた美醸ウェブサイト

<http://www.niigatabijo.com/>

村山和恵ブログ～酒サムライ・かずえの日本酒一合一会

<https://ameblo.jp/love-ricewine/>

アルコール発酵が起きるといった原始的な造り方でした。そのような造り方ですので、当然現在のように多く生産することはできず、大変貴重かつ特別なものでした。

◆ お神酒の存在

農耕民族である日本人において自然との共存が何より重要なことでしたが、自然という偉大な存在を人間の力ではどうにもできないことを先人は知っていたからこそ、農耕における節目の時期に神をおまつりし、様々なご馳走を提供したり、踊りを披露したりと神をもてなすことで、五穀豊穡や災いを遠ざけるというように、少しでも神の加護を受けようとしてきました。

貴重かつ特別な存在であった日本酒は、神様へのお供え物（神饌）として存在し、現代に至っています。地域やお祭りによって品目にバリエーションがあるかと思いますが、米、酒、塩、水が基本となり、家庭の神棚にしてもそれは同様であると思います。そもそ

も米だけでも大変ありがたいものですが、そこに手間を掛けて出来上がっている日本酒は、一層ありがたいものとして捉えられていたのではないのでしょうか。しかも、酔うといった作用が解明されていなかった頃の人々にとって、酩酊するといった体験自体がミステリアスで神がかったものとして捉えられたことでしょう。だからこそ、ハレの日を演出するものとして欠かせないという側面もあったのではないのでしょうか。

◆ せつく 節供と日本酒

祭りの場、神をもてなす場において日本酒は欠かせないものであったことは前述によりご理解いただけたと思いますが、私たちの日常生活の中でも馴染み深い「節供」についても日本酒が登場しています。節供は元々中国から伝わった考え方でしたが、それらに日本古来の風習が合わさった形で現在に至ります。五節供といわれるように節供は年に5回あり、1月7日（人日）、3月3日（上巳）、5月5日（端午）、7月7日（七夕）、9月9日（重陽）と、奇数の同じ数字が重なった日となっています（元旦は別格とされたようです）。元来奇数は「陽」の数といわれ、縁起が良いとされていますが、陽が極まると陰に転じ悪鬼が飛び回ると考えられていたことや、農耕における節目のタイミングでもあることから、神にお供えをして、厄が降りかからぬよう、無事を祈るようなものでした。

そんな節供にも日本酒が登場するのは、例えば上巳の節供における桃花酒、端午の節供の菖蒲酒、重



陽の節供の菊花酒などです。桃、菖蒲、菊にもそれぞれ意味がありますが、ざっくり申し上げるならば、それらの植物は悪いものを寄せ付けないであるとか、不老長寿といった霊力を持った植物であると考えられていたからで、それらを入れたお酒を飲むことでより祈りの効果を達成しようとしていたのでしょうか。

◆ 酒・避け・栄

日本酒は重要な儀式でも必ずといっていいほど登場します。例えば、婚礼における「三三九度」は日本酒を注いだ杯を互いに飲むことにより血縁関係ではない人間同士の絆を固めるという意味を持ちます。その他、地鎮祭や上棟式、船の進水式などでも登場します。近年そのような儀式が時代とともに薄れているということも耳にしますが、伝えていきたい文化であると思います。



このように日本酒は、祭礼や年中行事といった「ハレ」の日に欠かせないものとして現在に至っており、それらの背景を紐解くことにより、私たち日本人が大切にしてきたことを理解でき、それもまた楽しみの一つであると考えています。

日本酒の瓶の中に入っているのは単なる液体ではなく、歴史や文化、造り手の技や想いといった目に見えないものがぎっしりと詰まっています。それらに感謝の気持ちを抱きながら日本酒をいただくと、日本酒もそれに応えてくれるように一層味わい深いものとして私たちに接してくれる気がしています。